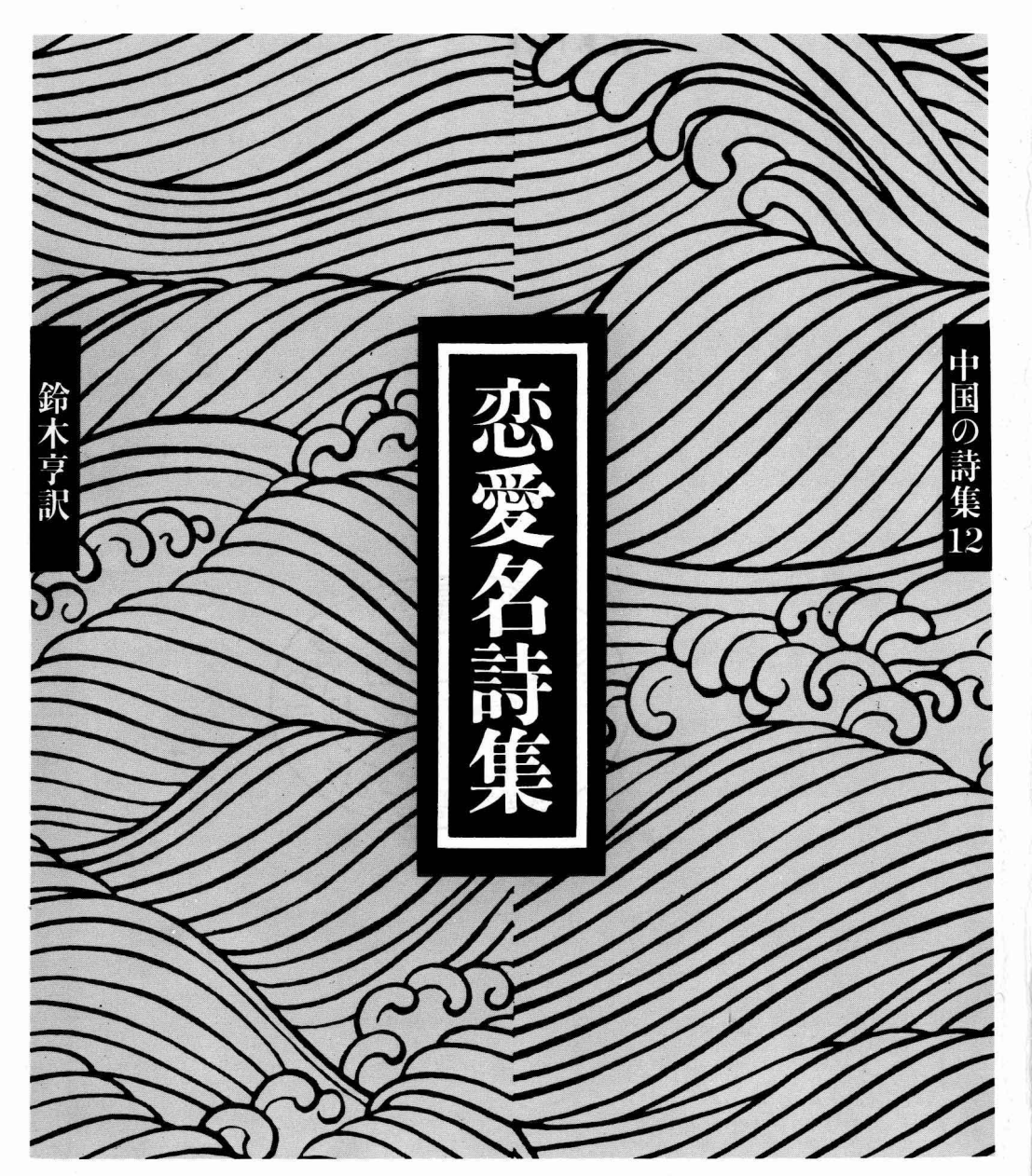


カラー版 中国の詩集 12

恋愛名詩集



中国の詩集12

恋愛名詩集

鈴木亨訳

訳者 鈴木 亨

1918年横浜市に生まれる。1942年慶応義塾大学文学部国文学科卒業。国文学者。詩人。跡見学園女子大学助教授。明治大学構師。「山の樹」主宰。詩論集『少年聖歌隊』、『近代詩入門』など。



中国の詩集 ⑫

恋愛名詩集

印刷カラー 旭印刷株式会社

本文信教印刷株式会社

製函 三真堂印刷紙器株式会社

製本 株式会社 宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

昭和四十七年十二月二十五日 初版発行

訳者 鈴木 亨 すずき ともおる

発行者 角川源義

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三
●東京一九五二〇八●二〇二
電話東京(三三)七二二(大代表)

目
次



周のうた
『詩経』国風抄
『古詩源』古逸抄

関 雎へたおやめへ

静 女へあの娘へ

氓へ女身流転へ

采 芣へ愁ごころへ

有女同車へ合乗りをした お嬢さんへ

溱 洧へはれの遊びへ

沢 陂へあのひとへ

東 山へ帰郷へ

琴 歌へエビグラム 1へ

魯連子へエビグラム 2へ

風俗通へエビグラム 3へ

易緯に引ける古詩へエビグラム 4へ

漢・魏・六朝のうた

上 邪へああへ

詩一首へ別れへ

婦に贈る詩 三首へ妻に贈るへ

答 詩へ夫に答えてへ

古詩十九首 二首へ古詩へ

東門行へ東門の歌へ

古絶句へつる草は……へ

馬を長城の窟に飲う行へ長城の苦役の

歌へ

予章行苦相篇へ女のうたへ

王主簿の「有所思」に同ずへ約束のと

きが来たのに……へ

玉階怨へ慕情へ

臨高台へ高どのへ

夜夜の曲へ夜ごとのうたへ

早行故人に逢い 車中より贈りものと

為すへ昔なじみのひとにへ

夜 愁へ夜愁へ

春 別へ春 ひとりへ

唐のうた

春江花月の夜へ春江花月の歌へ

塞上行へさきもりのうたへ

長干曲 二首へ長干のうたへ

春 夢へ春の夢へ

春 怨へ春の怨みへ

新月を拝すへおいのりへ

未詳 六

未詳 六

未詳 六

陳琳

傅玄 三

謝朓 六

同 六

沈約 六

同 三

同 六

同

王僧孺 六

蕭子顯 六

允

張若虛 六

王昌齡 六

崔顥 六

岑參 六

金昌緒 六

耿漳 二

玉台体 △一八むすめ

権徳興 一〇三

送衣の曲 △衣をおくるうた

王建 一〇四

新嫁娘 △花よめ

同 一〇六

竹枝詞 △唄

劉禹錫 一〇六

蘇小歌 △赤い芯

張祐 一〇

隴西行 △さきもり

陳陶 二三

秦淮に泊す △秦淮旅情

杜牧 二三

懷いを遣る △さすらいぐらし

同 二四

高樓 △高どの

于武陵 二五

錦瑟 △形見の琴

李商隱 二六

無題 △若い恋

同 二八

無題 △春の宴

同 三〇

無題 △生い立ちの歌

同 三三

夜雨 △北に寄す △雨の夜 妻に贈る

同 三四

更漏子 △三首 △恋

温庭筠 三五

江樓にて感を書す △川ぎしの高どのに

三三

……

夢江南 △一首 △おもいで

皇甫松 三三

采蓮子 △一首 △はすの実とり

同 三四

菩薩蠻 △二首 △江南のうた

韋莊 三七

灼灼を傷む △美人薄幸

同 四〇

意緒 △艶びと

韓偓 四三

宋のうた

一四

烏夜啼 △離愁

李煜 一四

菩薩蠻 △三首 △忍び逢い

同 一四

一斛珠 △あで姿

同 一五

烏夜啼 △恨み

同 一五

雨霖鈴 △惜別

柳永 一五

悼亡 △三首 △妻を悼む

梅堯臣 一六

哀しみを書す △悲歌

同 一六

夜 隣家の唱うを聴く △隣りのうた

同 一六

戊子正月二十六日 夜夢む △雪の夜

同 一六

踏莎行 △春の別れ

歐陽修 一七

南郷子 △あの子

同 一七

臨江仙 △酔いさめの……

晏幾道 一七

快閣に登る △樓閣で

黃庭堅 一七

滿庭芳 △別れの歌

秦觀 一七

青玉案 △悲歌

賀鑄 一八

玉樓春 △秋の歌

周邦彥 一八

長相思 △あいびき

康与志 一八

柳枝 △別れ

朱敦儒 一八

青玉案 △元宵の祭り

辛棄疾 一八

明・清のうた

一五

小車行〈小さい車〉

陳子龍 二〇五

琴河感旧 二首〈昔のひと〉

吳偉業 二〇七

買妾言〈千金で……〉

楊維禎 一四四

内人の生日〈妻の誕生日〉

吳嘉紀 二一〇

君の出でし自り〈恋ごころ〉

同 一六六

内子 王華姜を哭す〈妻を悼む〉

屈大均 二三三

西湖竹枝歌〈うた〉

同 一七五

白紵詞〈舞姫〉

王士禛 二六六

低田の婦〈瘦せ田の妻〉

沈周 一六六

遣懷雜詩〈述懷〉

袁枚 三三八

春思〈春の別れ〉

徐禎卿 二〇〇

内人の書を得〈妻のたより〉

孫原湘 三三三

秋江詞〈河の秋〉

何景明 二〇三

解説

作者小伝

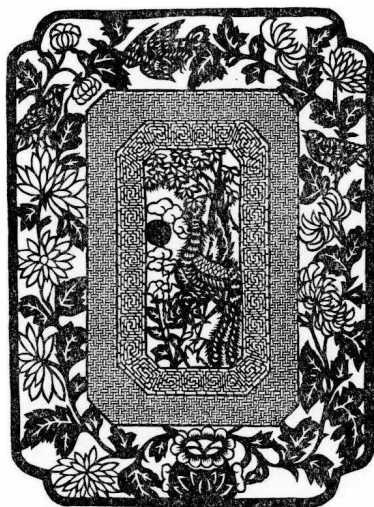
三五

三六

戀愛名詩集

周のうた

『詩経』国風抄
『古詩源』古逸抄



関かん
雎しよ

関関たる雎鳩しよきゆうは

河かの洲すに在り

窈窕ようちようたる淑女は

君子くんしの好逑こうきゆう

参差さんしたる苕菜ちようさいは

左右さうぶに之これを流ながる

窈窕ようちようたる淑女は

寤寐ごび之これを求む

之を求めて得えざれば

寤寐ごび思服しふくす

悠ゆうなる哉かな悠ゆうなる哉

輶ぎ転てん反側はんせうす

参差たる苜蓿は

左右に 之を采^とる

窈窕たる淑女は

琴瑟^{きんしつ} 之と友^{とも}しまん

参差たる苜蓿は

左右に 之を采^とる

窈窕たる淑女は

鐘鼓^{しょうこ} 之と楽しまん

へたおやめ

川の洲で 啼^なきかわす

なごやかな みさごのつがい――

しとやかな たおやめは

ますらおに 適うつれあい

みえがくれ する苺菜

川のみず かきわけて摘む――

しとやかな たおやめは
慕わしい 寝てもさめても

片思う たおやめは

慕わしい 寝てもさめても

悩ましさ はてもなく

身もだえる 夜ごと夜ごとを

みえがくれ するあさぎ

川のみず かきわけて引く――

たおやめと 語らおう

琴と瑟 ひびかうように

みえがくれ するあさぎ

川のみず かきわけえらぶ――

た お や め と 楽 し も う
鐘 鼓 鳴 り か う よ う に



静せい
女じょ

静女 其れ 姝たり
我を 城隅に 俟つ
愛すれども 見えす
首を搔いて 蜘蛛す

静女 其れ 變たり
我に 形管を 貽る
形管 煒たる有り
女の美を 説憚す

牧より 蕘を 帰る
洵に 美にして 且つ 異なり
女の美たるに 匪ず

美人の 貽なればなり

〈あの娘〉

しとやかな あの花はきれい
いつも逢う お城の塔に
どうかして 来てくれないと
うるたえる 髪をむしって

しとやかな あの花はきれい
赤い笛 贈ってくれた
キラキラと 光るその笛
あのひとの ようにかわいい

草の芽も 贈ってくれた
めずらしい 白いその芽は
すばらしい ひとに摘まれた
ものだもの とてもかわいい

氓ぼう

氓の蚩蚩ししたる

布ぬを抱だいて 糸いとに質かう

来きたりて 糸いとに質かうるに匪ちず

来きたりて 我われに即ついて謀はかる

子しを送しりて 淇きを涉わたり

頓丘とんきゅうに至いたる

我 期きを愆すすに匪ちず

子こに 良媒りょうばい無なし

将こう 子こ 怒いかる無なかれ

秋あき以もつて 期きと為なさん

彼かの埵垣きえんに乘のほりて

以もつて復関ふくかんを望のぞむ

復関ふくかんを見みざれば